中世公家の女性たち
—西園寺家を中心に—

亀井ダイチ・利永子

はじめに

武家中心に語られることの多い中世史のなかで、比較的語られることの多い公家に西園寺家がある。その理由としては、平安期の藤原道長を想起させるような天皇家との外戚関係、また京都と鎌倉を結ぶ立場の関東申次の地位を保有していたことがあげられる。これらのことから、西園寺家を語らずして鎌倉時代を語れない、といった本郷和人氏名づけるところの「西園寺氏中心史観」といった傾向が生まれ、それに対する批判も出ている[1]。確かに関東申次の役目は従来理解されていたほど絶対的なものではなかったことが論じられるなか、西園寺氏の役割を過大評価しすぎ、鎌倉時代を西園寺の独壇場と捉える見方には問題がある。しかし、西園寺家が天皇家と外戚関係にあったのは事実であるし、また鎌倉サイドとも血縁関係を有し、それが関東申次としての地位を得るに貢献したことは無視できないであろう。

中世における公家としての西園寺家そのもの・また鎌倉期におけるその台頭を理解するためには、その政治的・経済的側面だけではなく、文化的側面、そして人脈なども検討される必要がある。特に西園寺家の繁栄が天皇家・鎌倉幕府・摂関家などとの縁戚関係に強く結び付いているのであれば、そこで重要な役割を果たした女性たちの存在も考慮される必要があるだろう。現存する系図の殆どは男系であるが、女系をたどると今まで見えてこなかったつながりも明らかになってくるのである。

この論文では、鎌倉初期における西園寺家を、その女性たちを中心に捉えなおすことにより、中世公家社会における人のつながり——ヒューマン・ネットワークを考える一助にしたいと思う。

1. 西園寺家とその興隆

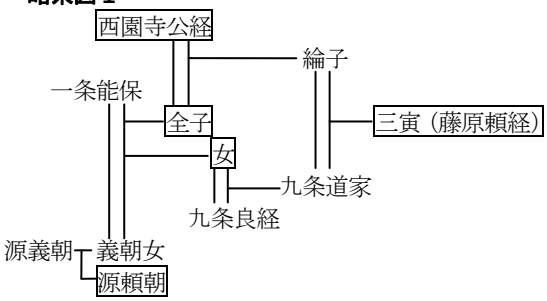
西園寺家がその家名「西園寺」を有するのは、その中興の祖と言われる公経（1171-1244）が現在金閣寺のある北山に西園寺という伽藍を営んでからである。公経の権勢はかなり卓越しており、かつての平清盛とも比べられる程度であったことが同時代の日記から分かる。

今日殿下御渡禅門云々、及申剋遂以閉眼云々。京中物忿、春秋七十四云々、年来富貴栄華、皆以如夢、哀哉々々、朝之蠹害、世之奸臣也。春宮外曽祖、関白殿・右大臣殿外祖也、於身不賤、然而無常之理難遁歟、前右府以下子息等皆以喪籠云々、近年大旨任意行世事、上下側目、遂以如此、天譴猶可恐云々、事之次第不遑具記而已。」

（『平戸記』寛元２年（1244）８月 29 日条）[2]

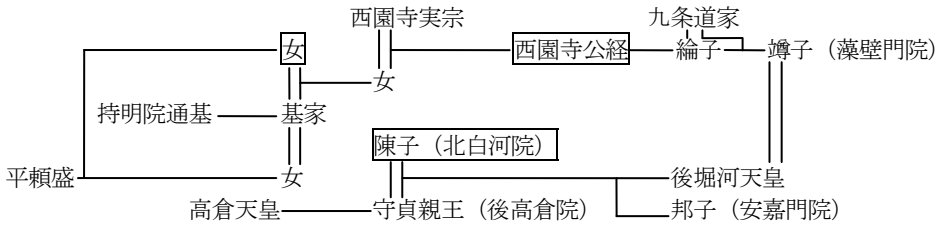
その公経が頼朝の妹婿・一条能保の女と結ばれ、それが鎌倉との関係を強めることになったのはよく知られている。この結婚で生まれた娘・綸子（1191-1251）と九条道家の間に生まれた三寅（後の藤原頼経）が 4 代将軍となったわけだが、実は九条道家の母は公経室の姉妹である。つまり、西園寺公経は自らの婚姻と娘の婚姻を通じて九条家、並びに鎌倉と強い結びつきを得ることになったのである（略系図１参照）。

略系図１



承久の乱の後、仲恭天皇が廃され、後鳥羽、土御門、順徳の三上皇がそれぞれ配流された後、次の天皇として選ばれたのは高倉天皇の孫、茂仁親王（後堀河天皇 1212-1234：在位 1221-1232）であった。その父守貞親王（1179-1223）は天皇の父であることを以て即位することなく院号を受け後高倉院と呼ばれるようになるが、この後高倉擁立に最も力のあったのがその妃で後堀河天皇の母である北白河院陳子（1173 - 1238）であり[3]、公経にとっては叔母にあたる女性であった（略系図２参照）。

略系図 2



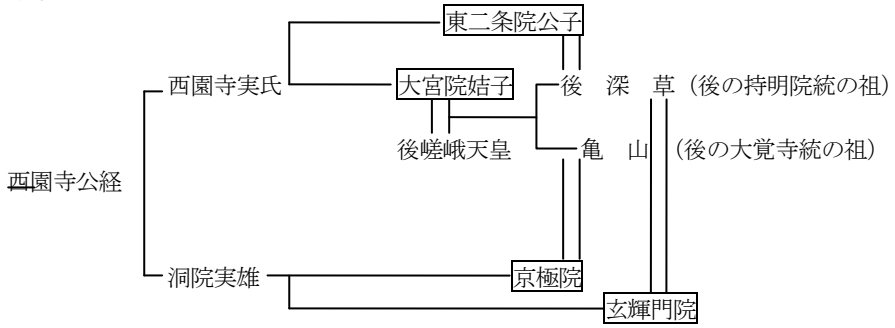
元々後高倉と陳子の結びつきも、公経の祖母にあたる持明院基家室が後高倉の乳母であったことによるという[4]。龍粛は、この御高倉擁立に西園寺公経が大きな役割を果たしたと述べる[5]。この説に関しては、御鳥羽とその皇子の全てが乱に関わった以上、後高倉院系以外に皇位につく候補者は他にいなかったことから疑問が呈せられているが[6]、もし公経の介入があったとした場合、後高倉の乳母であった祖母と、妃であった叔母陳子、この二人の女性たちの存在を無視して語ることは出来ない。彼女たちが公経の為に何か特別な計らいをしたのかどうか史料から伺うことは出来ないが、湯ノ上は元仁元年（1224）に行われた西園寺の供養に北白河院がその娘・安嘉門院と共に出席していることを引き、北白河院と公経の深い関わりを指摘している[7]。一代で西園寺家の繁栄を築きあげたと言われる公経の周囲に、こうした女性たちの姿があったことは注目すべきではないかと思う。

2. 外戚としての西園寺

西園寺家からは多くの女性が入内し、西園寺家を天皇家の外戚とする上で大きな役割を果たしている。また先に述べた九条家などとの婚姻関係を通じて、その関係は 2 重に重なることも多い。公経にとって後堀河天皇は叔母の子であるからその系統からみると従兄弟にあたるが、後堀河天皇の中宮となった尊子（1209 - 1233）は公経女綸子と九条道家との間に生まれた娘であり、その系統からたどると後堀河の義理の祖父ということになる（略系図 2 参照）。

後嵯峨天皇の后となった西園寺実氏女・大宮院姞子（1225 - 1292）は後深草・亀山の母でもあるが、その後深草の中宮となったのは大宮院の妹である東二条院公子（1232 - 1304）。後深草の後宮には公経の娘が一人、また実氏の姪で大宮院・東二条院とは従姉妹にあたる女性も二人いるが、その内の一人・玄輝門院愔子（1246 - 1329）は実氏の異母兄弟で洞院家をたてた洞院実雄女である（略系図 3 参照）。

略系図 3



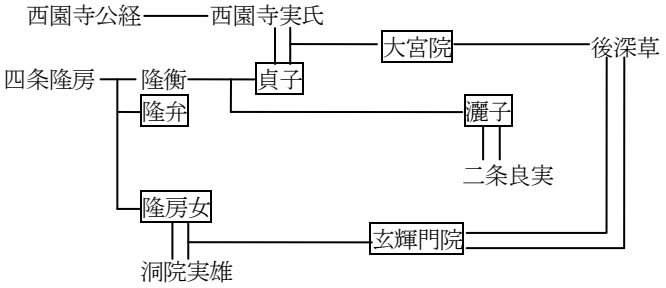
洞院実雄は子女多く、その点、一時期は西園寺家を圧倒するほどの勢力を見せたこともあった程で、いわば本家にあたる西園寺家とは対立するような状態にもあったという。実際、後深草と亀山の後宮に入った西園寺直系の女性と洞院実雄の娘をみると、後深草の中宮であった東二条院や亀山の中宮今出川院には皇子が恵まれなかったのに対し、玄輝門院は後の伏見天皇となる熙仁親王他を生み、また亀山皇后となった京極院は後に後宇多となる世仁親王を生んでいる。

しかし、玄輝門院を中心にこの関係を捉えなおしてみると、意外なところにもうひとつつながりがあるのが分かる。玄輝門院の母は四条隆房女であり、西園寺実氏の室で大宮院の母・四条貞子の叔母にあたる。つまり、玄輝門院は、四条貞子とは従姉妹の関係になり、父系ばかりではなく母系においても西園寺家と強く結び付いていることになる（略系図 4 参照）。

玄輝門院の母と実氏の室の出身である四条家と西園寺家との関係を考えるとき、無視できない人物がいる。それは鶴岡八幡宮の別当法印を勤めた僧隆弁（1208 - 1283）である。加藤はこの隆弁を「鎌倉時代の政僧」と位置付け、政治面で京都と鎌倉の橋渡し的な役割を果たし、また北条家とのつながりも深く、幕府から深い信頼を寄せられていたことを指摘する[8]。一見西園寺家とは何の血縁関係もないように

みえる隆弁だが、実は四条家の出身（四条隆房男、隆衡の弟）であり、西園寺実氏の室・貞子の叔父にあたるのである。また貞子の妹・灑子は九条道家とは不仲であった息子・二条良実の室となっている。その点、隆弁は西園寺家・二条家双方の当主の室の叔父ということになり、西園寺実氏もその室・貞子を通じて鎌倉と二条家との結びつきを深めることが可能になっているのである（略系図 4 参照）。

略系図 4



3. 人のつながりと文化

こうした縁戚関係は、家と家、人と人を結びつけるだけではなく、意外な結果をももたらした。先に述べた大宮院だが、彼女の文化的役割のひとつとして現存唯一の物語歌集「風葉和歌集」の撰集が挙げられる。これは平安から鎌倉時代にかけて書かれた200 以上の作り物語から集められた和歌が 1000 首以上集められている歌集であり、その性質上、散逸物語研究では重要資料としてよく引用されるが、歴史的な研究には殆ど姿を現すことはない。それは、この和歌集の成立過程について知ることが出来るのが基本的にその序文のみであり、当時の公卿日記等には何も記されていないという事情が大きいと思われる。

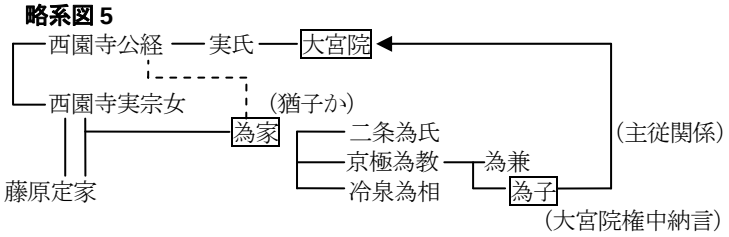
この序文を詳細に分析した樋口芳麻呂は、この和歌集は 2 段階の編纂過程を経ており、まず大宮院とその周辺の女房らが基本的に物語から歌の選出を行い、その後ある程度形の整ったものを撰者の手に送り、最終的な精撰作業が行われたと論じている[9]。

物語から歌を選びだす、といった作業そのものには前例がなかったわけではないが、風葉集に収められた和歌が 200 以上もの、それも作り物語のみから限定して集められたことを考えるとき、それだけの物語をどうやって手元に集めたのか、ということが問題になろう。

藤原定家が九条良経の命令で『物語二百番歌合』の右方である『後百番歌合』を撰定するに際し、宣陽門院所持の御本の物語を借りて撰進した例もあり[10]、各家にそれなりの文庫があったにせよ、100 年近く前からの物語を含め、それだけの数の物語を一か所に集めるにはあちらこちらに手を広げ、借り受ける必要があったに違いない。実際、風葉集序文には、「この物語のなからのはしのふるくつくれるも、あしかみのちかき世にいてくるも、はまのまさに数つもり、しきのはねかきあきあへぬままに、よもきかしまにあらねど、なのみをききてもとめ得ぬもおほく」と[11]、その名は伝わっているものの入手できなかった物語もあった、ということが記されている。その点、大宮院が西園寺家の女性であったということは注目に値する。経済的に豊かであったのみならず、婚姻関係などを通じて多くの家とつながりのあった西園寺家をバックに持つ大宮院であってこそ、この撰集作業が可能だったと言えるのではないだろうか。

また、最終的な撰者であり、序文の作成者であった人物としては、藤原定家の子・為家だということで学界では意見の一致をみている[12]。その理由としては多々あるが、ひとつは為家と大宮院との関係に基づくものである。為家の父・定家には妻として知られている女性が二人いるが、最初の妻と離縁して迎えた新しい妻は西園寺公経の姉であった。つまり、大宮院にとって為家は父の従兄弟となるわけだが、その他に為家は尊卑文脈に「太相国公経公子」と記されており、公経が猶子として取ったものと思われる。また更に為家の孫娘と言われる京極為子（1252?－1317?）は、大宮院権中納言の名で大宮院のもとに女房として仕えていた（略系図 5 参照）。こうして、大宮院の西園寺家と為家、そしてその家系は、血縁関係を超えて親しく結びついていたのである。

略系図 5



また、『風葉和歌集』をさかのぼること 70 年程前に書かれた文学評論書『無名草子』には、「いみじけれども、女ばかり口惜しきものなし。昔より色を好み、道を習ふ輩多かれども、女のいまだ集など撰ぶことなきこそ、いと口惜しけれ」と[13]、女性が和歌の撰集に関われないことを嘆く箇所があるが、その嘆きを超えて大宮院が『風葉和歌集』撰集を主導したのには、こうした人とのつながりが大きく働いていたからであったと言えるだろう。

おわりに

ここで取り上げた女性たちは、西園寺家に関わる女性のうち、ほんのわずかに過ぎない。しかし、こうした女性たちを中心とした人のつながりをみていくと、政治史上では現れない関係なども明らかになり、簡単にひとくくりには出来ない複雑な人間関係が社会を左右していたことも分かるのである。また、こうした女性たちは家の繁栄・継続においても大きな役割を果たしていた。時代は下るが、鎌倉幕府が滅んだ後、後醍醐天皇の暗殺を謀った西園寺公宗がその弟の密告により逮捕・殺害されたのち、その遺児の実俊を守ったのはその実母名子や乳母らの女性たちであった[14]。そうした女性たちの姿は、文学的資料なども合わせて用いることにより、より鮮やかに現れてくる。中世公家社会の在り方を考えるためには、史料の表にはあまり現れてこない女性たちにも、もっと注目していく必要があるのではないだろうか。

註

1. 本郷和人「西園寺氏再考」(『日本歴史』633、2001 年)。
2. この他に、『明月記』の「超過福原平禅門か」(寛喜 3 年 3 月 22 日条)、『故一品記』の「当世之重臣無可比肩之人、諸事如思之人也」(仁治 3 年(1242)6 月 3 日条)等が挙げられる。
3. 『五代帝王物語』は後世の妨げとなるとして躊躇う守貞親王に対し、陳子が「いかにかゝる事をば思食さるゝぞ。宮々の御ためも旁めでたかるべし、子細あるまじ」として説得したとしている。
4. 上横手雅敬『日本の中世 8－院政と平氏、鎌倉政権』、中央公論社、2002 年。
5. 龍粛『鎌倉時代　下』、春秋社、1957 年。
6. 前掲『日本の中世 8－院政と平氏、鎌倉政権』
7. 湯之上隆「北白河院藤原陳子とその周辺：明恵に関する新史料」(『日本歴史』483、1988 年)。
8. 加藤功「鎌倉の政僧」(『歴史教育』16・12、1968 年)
9. 樋口芳麻呂「風葉和歌集序文考―風葉集の成立・撰者について」(『国語と国文学』42.1、42.2、1965 年)
   樋口が分析した序文の該当箇所は「かかるに今わか君あめのしたの国の母といひあふかれましまして、はたとせあまりいつかへりになりぬるに、ももしきのはるのえたえたさきつつく色にたのしひ、はこやの山の秋の月かなしさ誘ふひかりをもてあまひましますひまに、もろもろのことをすてたまはぬあまり、いにしへ今の物語のなかよりかき集められにける歌を、人知れぬ山かくれにしのひてかよふ秋風の吹きおくれるにおどろけば、これをもととして更に選びそへ、巻をわかち言の葉をととのへたてまつるべきおほせことになんありける」である。
10. 樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房、1982 年。
11. 中野荘次・藤井隆『増訂　校本風葉和歌集』、友山文庫、1970 年。
12. 米田明美『風葉和歌集の構造に関する研究』笠間書院、1996 年。
13. 『無名草子』古典文学集成第 7 巻、新潮社、1976 年。
14. 田端泰子『乳母の力―歴史を支えた女たち』吉川弘文館、2005 年

参考文献

上横手雅敬『日本の中世 8－院政と平氏、鎌倉政権』、中央公論社、2002 年
加藤功「鎌倉の政僧」(『歴史教育』16・12、1968 年)
後藤みち子『中世公家の家と女性』吉川弘文館、2002 年
佐久間広子「宗尊親王鎌倉将軍家就任の歴史的背景」(『政治経済史学』370、1997 年)
菅原正子『中世公家の経済と文化』吉川弘文館、1998 年
田辺泰子『乳母の力：歴史を支えた女たち』吉川弘文館、2005 年
樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房、1982 年
樋口芳麻呂「風葉和歌集序文考―風葉集の成立・撰者について」(『国語と国文学』42.1、42.2、1965 年)
本郷和人「西園寺氏再考」(『日本歴史』633、2001 年)
森茂暁『鎌倉の朝幕関係』思文閣出版、1991 年
湯之上隆「北白河院藤原陳子とその周辺―明恵に関する新史料」(『日本歴史』483、1988 年)
米田明美『風葉和歌集の構造に関する研究』笠間書院、1996 年
龍粛『鎌倉時代　下』春秋社、1957 年

かめいだいち　りえこ／南カリフォルニア大学大学院　博士候補生